

生命いのちより大切なものはあるか*

——「生命いのちの尊厳の確立」を期すキリスト教信仰からの応答

ナグネ（洛雲海）

I. はじめに

生命いのちは尊く貴い。生命いのちが他に掛け替えないほどに大切であるということは、理屈を越えて世に広く認められてきた。日本では「命あつての物種」と言われ、旧約聖書にも人は「命のためには全財産を差し出すもの」（ヨブ記二・四）という言葉がある。⁽¹⁾ 新約聖書には、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」（マタイ福音書一六・二六）というイエス・キリストの言葉も記録されている。では、「生命いのちより大切なものはあるか」と問えば、どうだろうか。

われわれは、この間に対してキリスト教信仰の立場からの応答を試みる。目的は「生命いのちの大切さ」とその根拠を示すことにある。それによって「生命いのちの尊厳の確立」の重要性を再考し、その確立に幾許かでも資することを願うのである。

ここで、まず確認しておきたいのは「いのち」の表記についてである。「いのち」の意味は多様である。⁽²⁾ 金明容が

指摘するように、英語のライフ (Life) やドイツ語のレーベン (Leben) などの諸外国語には、「命」と共に「生」の意味が広く含まれるが、これを漢字で「命」とか「生」あるいはハングルで「サムーヂ」などと表記しても、英語のライフやレーベンの意味を包括的に表すことは困難である。こうした限界を意識しつつ、これを表記するに際して、拙稿では「生命」と表記することとしたい。「生命」と書くとき、拙稿では何よりも新約聖書において使われる「ゾーエー (zōē)」と「プシユケー (ψυχή)」の意味が含まれることが念頭に置かれている。

われわれは、二つの命題を掲げることから始めてみよう。

命題 1

キリスト者には、自己の生命より大切にしよう期待されるものがある。それは愛する他者の生命である。愛は生命を生かそうとする。最も大きな愛は、他者の生命を生かすために自己の生命をさえ捨てる。この愛は、生命の根源である神によって、生命であるイエス・キリストの死を通して示された。

命題 2

キリスト者には、生命より大切なものはない。生命の根源である神は、生命の神であって、生命だからである。愛は生命を生かそうとする。最も大きな愛は、他者の生命を生かすために自己の生命をさえ捨てる。この愛は、愛である神によって、生命であるイエス・キリストの死を通して示された。

以下、われわれは上記二つの命題をめぐって論を展開していくこととする。

II. 「生命の尊嚴の確立」が求められる背景

世界で最も急を要する課題の一つは「生命の尊嚴の確立」である。「生命の尊嚴」が問題となるのは、生命を危機へと追いやるような発想や状況がこの世にあるからである。国家間の戦争や無差別に行われるテロ行為は各地で頻発しており、民族間や組織間それに個人間の争いも止むことを知らない。それらのどこにおいても殺人や破壊による死の問題が潜んでいる。死は関係を喪失することであり、またその結果である。死のあるところではどこでも関係喪失が起こっている。個々人に目を向けてみれば、日本でも韓国でもその他多くの国々において自死が深刻な社会問題となっている。この自死も一つの関係喪失の出来事である。世界中至るところで、生命をこの関係喪失へと追いやるような暴力が起こっているのであり、その渦中で苦しみ悩み言葉を失っている人々が数え切れないほどいるのである。世界には「生命の尊嚴」が踏みにじられている現実がある。このことが、「生命の尊嚴の確立」が求められる背景である。

阿久戸光晴は、これまで法学を視野に入れたキリスト教倫理学の立場から「いのちの尊嚴」についての概念構想とその確立の必要性を社会に向かって訴えてきた。その要点は「自分の権利を十分主張できない存在の中核にある『いのち』に注目し、この『いのち』を周りも守るべきである」という主張にある⁽³⁾。その背景には、例えば「現代日本で毎年ほぼ三万人と言われる自死問題」⁽⁴⁾のような悲劇的かつ看過し難い状況と、そうした状況に追い込まれる人々を十分支援できないでいる社会的現実がある。こうした現実を背を向けず、かえってこれを凝視し、憂い、その改善に向けて心を砕いて意を尽くすことが求められる。それは、愛なくしてはできない。

阿久戸の関心は、社会において強者とはなしえない人々とそのような人々の生命へと向けられている。そこでの問題

の本質は人間の「いのちが危機にさらされること」⁽⁵⁾である。この世界には強者とは見なし難い人々や「自分の権利を十分主張できない」人々、それ故に自立困難な人々が「いる」のであり、またそのような人々の生命が危機にさらされるような社会的現実が「ある」のである。この現実から目を背けず、他者からの支援を必要とする人々の自立支援に向けた努力が周囲からも必要とされているということが、阿久戸の主張の眼目である。

この視点は、例えば死刑のような刑罰制度にも向けられる。阿久戸は神学者カール・バルト (Karl Barth) によって展開された死刑廃止論を踏まえて、「生を否定する刑罰でなく生を肯定する刑罰」の重要性を訴える⁽⁶⁾。しかし、彼はさらにバルトによる神学的観点とその論理の枠を越えて社会学的観点からも死刑制度に疑義を呈する。阿久戸によれば、死刑は犯罪抑止の観点からも、応報の観点からも、社会防衛の観点からも堅持されるべきものではない。なぜなら、死刑は必ずしも犯罪抑止になっていないと言いつても、それがいつでも遺族の虚無感からの回復になるわけでもないからである。さらに、死刑は社会防衛になっていないわけではない。こうして、阿久戸は自らの信仰に基づいて死刑制度に反対するだけでなく、信仰の枠を越えてなお、死刑執行の結果とその効果の観点からもこれに反対するのである。そして彼は、むしろ刑罰においても生を肯定し、加害者には「生きる厳しさ」を教育し、「いのちの尊厳」の精神に基づいて加害者が世を去るまで賞罰に打ち込ませることの重要性を提示し、日本社会に蔓延する「ネクロフィラス症候群をバイオフィラス（生命を愛する）精神に変えること」こそが、日本と日本社会の戦うべき最大課題の一つであると主張した⁽⁷⁾。

この主張において特に注目される点は、人が誰でも周囲から自分の「いのちの尊厳が守られている」という主観的自覚を持てるようにすることに留まらず、「さらに国家や社会からも『いのちの尊厳』を守る種々の客観的諸制度が確立される」ことを訴える点である。それは、全ての人の「いのちの尊厳」を守るための客観的諸制度が確立されてこそ「人は自立努力ができるようになる⁽⁸⁾」という信念に基づいている。その根底にあるのは、人間の弱さに対する裁きでは

なく、その弱さの深刻さを徹底的に認識するが故に、それを制度としても支えようとする慈しみと愛である。

要するに、世界には「生命の尊厳の確立」が急がれる状況があるのである。この問題が真摯に受け止められないところでは人間の生命は軽んじられ、また生命が軽んじられるところではどこでも死が近くなる。そのような場を支配するのは恐るべき愛、しかも誰もがそこから自由になることの非常に困難な愛、すなわち利己的自己愛である。もちろん、生命はいつでも本質的に死と背中合わせではある。しかし、今まさに生命が危機に追いやられている人々や世界的状況があるという現実が忘れられてはならない。その現実を直視し、危機に瀕している生命を助け救おうと努めること、あるいはその危機を少しでも遠ざけるよう努めることが具体的に求められる。そのために必要なことこそが「生命の尊厳の確立」である。この努力がなされることによって、人は「自分の生命の尊厳は守られている」ということが、単なる主観的な思い込みを越えて、客観的にも保障されることになるのである。

「生命の尊厳の確立」は、「生命」あるところなら世界中どこであっても、喫緊かつ最重要課題とされるべきである。この課題に取り組むために、われわれは生命の尊厳が危機に瀕し、踏みにじられている状況から目を背けない愛と、その状況に対して果敢に立ち向かう勇気を出す必要がある。その際、われわれには何よりも世の現実改善のために「生命の尊厳の確立」を祈り願うこと、そしてそのために行動することが求められている。

Ⅲ. 「生命」、あるいはその逆としての「死」について

それにしても、生命とは何なのだろう。哲学や科学あるいはその他様々な分野において、これまでどれほど多くの人々がこの神秘に満ちた問題と取り組み、考察を深めてきたことだろうか。生命の関わる諸問題は、現今の自然科学分

野においては生命科学の名のもとに飛躍的な発展を遂げつつあるし、社会科学はもちろんのこと、人文科学あるいは人文科学の分野においても、例えば生命哲学や生命神学など、独自の展開を遂げつつある。しかし、これまで各分野でなされてきた生命に関する諸研究やその諸成果を整理し提示することは他に譲ることとし、われわれは以下、あくまでもキリスト教神学の観点から生命の問題に接近することとしよう。

金明容によれば、生命は今日二一世紀のキリスト教神学において最も重要な神学的主題である。生命神学の関係する領域は非常に広範囲である。金明容によれば「生命神学という概念を使う場合には生態学的問題や生命医学的な問題が中心に置かれ、生のための神学という概念を使う場合には貧困からの解放のような経済的問題や政治・社会的な問題が神学の重要問題として登場⁽¹⁰⁾」する。生ならびに生命全般を扱う生命神学では、政治・経済・社会などこの世の生に関わる問題、あるいは生態系や人間の肉体などこの世の生命に関わる問題、さらには霊や魂そして永遠の生命などの死後の問題に至るまでの諸問題が包括的に取り上げられるのである。⁽¹¹⁾ 生命の問題は、今や統一的 (holistic) な主題として神学界においても立ち現れてきている。とはいうものの、その動向を紹介し、検討することもここでは差し控えたい。その代わり、われわれはここで生命の対極にあつて生命を否定するもの、生命の逆にして生命と不可分なもの、すなわち「死」を取り上げて、逆説的な仕方⁽¹²⁾で生命の問題にアプローチしてみることとしよう。

生命は生を生としてあらしめる根拠を意味する。またそれは生きることとしての生そのものをも意味する。誰も自らの意思で生まれた者はいない。生命は、キリスト教信仰においては神の賜物である。生命は所与のものであるが故に、これを自己の所有とすることは本来できないし許されない。桑田秀延によれば、「キリスト教は人間に自然に与えられている生命、人間に固有な精神的生命ばかりでなく、肉体的な生命をも神の賜物として認める⁽¹²⁾」。このような生命理解は、人間の心や霊や魂あるいは精神などの面からのみ人間の生命を捉えるのではなく、その肉体面を含む全人的なものとして生命を捉え、その全てを神の賜物として理解するものとして重要である。この視点は、生命の問題を人間のそれ

に限定せず、肉体を持つ人間以外の動物や植物にまで開かれたものとする。

他方、生命については、生命の事柄だけをもつて論じてもその一面を論じることにはかならない。生命について論じられるところでは、必ず死についても論じられることとなる。なぜなら、既述のように、生命はいつでも本質的に死と背中合わせだからである。生命あるところには死が訪れる。生命あるものは死ぬのである。だから、生命を問う者は、死について問うことを避けることができない。エーバーハルト・ユンゲル (E. Jungel) は「死について問うことは、生を問うこと」と考えたし、ウラディミール・ジャンケレヴィッチ (V. Jankelévitch) も「死を考える者は生を考える」⁽¹⁴⁾と書き残した。そうであれば、逆に「生を考える者は死を考える」のであり、「生について問うことは、死を問うこと」であると言つてもよいであろう。死について考え問うことは、逆説的ながら生を含む生命について考え問うことなのである。しかも、「死と対面することは、真の生の具体化に属する」⁽¹⁵⁾のであれば、真の生命について問い、それによる真の生の具体化を望む人は、いつそう死の問題と対面することを避けることはできなくなる。

生命を人間のそれに限った場合、人間の生は、ユンゲルによれば「根本的に死との関係によつて規定されて」⁽¹⁶⁾いる。生は「根本的に死に」⁽¹⁷⁾関わっているからである。その意味で、「死は初めから人間の生に属して」⁽¹⁸⁾いるものである。「生の終りは、死の始まりよりも早く来るわけではなく、それは同時に起こる」⁽¹⁹⁾。両者の関係はあたかもコインの表裏のようであつて、死は生命の誕生と生の系譜に「裏生地のようにして貼りつ」⁽²⁰⁾（関根清三、竹内裕）⁽²⁰⁾いている。しかも、生命あるときに死はなく、逆に死があるときにはもはやそこに生命はない。このように、生命と死とは徹底的に相反する事柄あるいは真逆の事態としてある。両者は決して共在し得ないにもかかわらず、共に他方の事態を前提とする関係にある。したがつて、生命に関する言及は、それと不可分の関係にある死についての言及を自ずから要求することとなる。サナトロジー (thanatology) の訳語が日本では広く「死生学」あるいは「生死学」とされる理由もここに⁽²¹⁾ある。死 (サナトス) の学 (ロゴス) は、まさに生の学でもあるということである。

死は生命いのちと同様、神秘に満ちている。人は死亡という自然現象を科学によってある程度考察することはできて、死のもつ超自然的神秘についてはその限りではない。死の超自然的神秘は理性では捉えきれない領域、すなわち信仰あるいは宗教の領域に属する。だから、ジャンケレヴィッチは死を「越経験な神秘と自然現象との接点22」と見なしたし、ユンゲルは死が謎に満ちて定義し難く、その点において神と共通性をもっていると指摘した。23 こうして、「いのちの言葉―神の言葉」をめぐってミシェル・アンリ (M. Henry) が記したことが、死についても当てはまることになる。つまり、「宗教の根本主題を考察することによって、いわゆる理性的思考にはうかがいしれない広大な未知の領域が開かれる」ということである。生命いのちと共に死は宗教の根本主題である。死について考察することによって、人は理性の限界を思い知らされ、その神秘の前で自ら謙虚な者とされる。「死に瀕した人間はまだ死を知っているわけではなく、死を問う人間で死を経験したものは誰もいない」という現実、しかも生命いのちある者は必ず死を迎えるという現実の中を、人は生きるしかない。生きながら死そのものに到達することは誰にもできず、人はただ他人の死を通して間接的に死を経験するしかない。死んだ時、自分とははや生きてはいない。生きている人間にとって、死はいつでも他人の事ではない。「死は他人にしか訪れないもの」24 (ジャンケレヴィッチ)、それでいて必ず自分にも死は訪れるという予感25は誰でも皆経験的に持っている。一方、「生の終りは、死の始まり」27であるが、「生と死との間に境界を引くことは困難」28 (平山正実)であるという現実がある。人間を「もはやほとんど死んでいる」者として捉える考え方が古来よりあったことを考慮する必要はあるが、「いつから屍体がそこにあるのか言うことは難し」30 ということは、医療技術が大きく発展しつつある現代においてなお、死がその現象面においてさえ神秘と謎に満ちて定義し難いことを示してくれる。

死はその秘儀的神秘性のゆえに、その受け止められ方も様々である。それは死に臨む人の態度あるいは姿において顕わとなる。ユンゲルが比較したように、死刑囚として死を迎えたソクラテスとイエスの姿は対照的である。ソクラテスにとつて死は喜びであり幸福であった。彼にとつて、死は消滅ではなく肉体からの魂の解放であった。そこで、彼は死

を恐れるどころか、むしろ落ち着いて、喜びをもってこれを迎えることができた。しかし、イエスは違った。自己の死が近づいたことが予想されたとき、イエスは喜ぶどころか苦しみもだえ、「血のしたたるように汗を流しながら……御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」（ルカ福音書二二・四二、四四）と神に祈ったのである。しかも、十字架上では「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」と絶叫し、まことに悲惨極まる仕方息をひきとつたのであつた。死を目前とした時の、この両者の姿の違いはどこからくるのであろうか。それは死の捉え方とそれを支える信仰による。

キリスト教においては、ソクラテスのような堂々とした恐れなき喜びの死ではなく、むしろイエスの惨めで凄絶な死こそが救いとして宣べ伝えられてきた。なぜ、このようなイエスの死が救いなどと言えるのか。それは、一つにはキリストが「死をもって死を滅ぼし」（正教会祈禱書『五旬経略』）、「彼の死によつて死が殺された」（ルター）と信じる信仰に因る。使徒パウロは、信仰によつて洗礼を受けて新しい命に生きる者には、キリストによる死への勝利が栄光と共に自分のものとなると信じていたし、また人にもそのように説いたのであつた（ロマ書六・四一―一、八・一七）。救いは、イエス・キリストの死を「死の死」として受け取る信仰に鍵がある。

死は生命いのちにとつて最大の否定である。だから、死の死は生命いのちにとつて最大の二重否定である。二重否定は強い肯定であるが故に、死の死は生命いのちにとつて最大の肯定となる。死の死は、死を経て現れる生命いのち、復活による新しい生命いのちをもたず。こうして、キリスト者は、死んだイエスが死をもって死を滅ぼし、復活して死に勝利し、生命いのちとして今も生きていることを信仰によつて告白し、証しするのである。キリストの死は、死の死として復活による新しい生命いのちをもたらした。それは、死が死のままではいられなくなる世界の新しい始まりだったのである。

キリスト教信仰において、罪と死を切り離すことはできない。使徒パウロによれば、キリストの死は罪に対する死であつた（ロマ書六・一〇）。また、死は「罪が支払う報酬」（ロマ書六・二三）とも表現された。したがって、死に至る

過程は様々であつても、全て「死は、罪の見える姿」(K・ラーナー)として捉えられる。罪との関係で死を捉える限り、死は徹底して人間の事柄としてのみある。聖書においては生が「関係をもつこと」であつて、とりわけ生きている神との関係をもつことを意味し、生との関係を破壊するあらゆる力が罪と見なされる。死は、この生との関係が完全に破壊された関係喪失に向かわせる出来事として、罪の結果なのである。それ故に、ユンゲルは罪を「関係喪失へと追いやる無神の力」とし、死を「関係喪失へと追いやることの総計」と言い切ることができた。⁽³⁴⁾

イエスは自らの死をソクラテスのようには受け入れなかった。それは、死ぬことが神との関係を喪失することであり、それ以上の悲しみはなかったからであろう。そのことは、「なぜわたしをお見捨てになつたのですか」というイエスの叫びに凝縮されている。神から見捨てられること、それによつて神との関係喪失状態に置かれること以上の不幸は、人間にはない。それこそ地獄である。その意味で、イエスは十字架上で、死へと向かう中で、また死において、まさにこの地獄を体験したのであつた。既述のように、死は関係喪失へと追いやることの総計であるのなら、イエス・キリストを信じ、彼に従おうとする人は、感謝や喜びをもつて死それ自体を受け入れることはできない。むしろ、死は生命を破壊するものとして、生命との関係あるいは神との関係を絶ち切らせるものとして、いつでも罪と共に徹底して闘わねばならない。キリスト者は死を喜ぶのではない。そうではなくて、イエス・キリストによる死の死を喜ぶのである。すなわち生命を喜ぶのである。

生命の逆は死である。だから、死と闘うことは生命を守り生かすことである。それは、生命あるものに死をもたらそうとする勢力(罪)や事態に抵抗することを意味する。イエスの闘いは、まさにこの死をもたらそうとする勢力への抵抗、すなわち生命を生かそうとするための、罪に対する抵抗であつた。それは生命の尊厳を守るための闘いでもあつた。イエス・キリストはその闘いを闘い抜いて死んだが、その死をもつて死を滅ぼし、自己以外の生命を生かそうとしたのだつた。そこに最も大きな愛が示されたのである。ユルゲン・モルトマン(J. Moltmann)によれば、生と死の違

いを決めるものは「愛」である。愛は、生きて存在することを欲し、死んで存在しなくなることを欲しはしない。それ故に、「ただ私がわが子を愛しているからこそ、私はわが子の墓で泣き、またその死を嘆き、わが子が死んだということに甘んずることができない」⁽³⁵⁾のである。愛は死を欲しない。逆に生命を欲し、存在を欲する。死を欲することは罪である。死を欲してはならない。死を愛さず、生命を愛さなければならぬ。イエスの死を告げ知らせることは、彼の死の死を告げ知らせることである。同時に復活したキリストによる新しい生命を告げ知らせることである。イエスの死を告げ知らせることは、生命を愛することなのである。

IV. 生命よりも大切なもの

キリスト者の詩人で画家の星野富弘の著作に『いのちより大切なもの』という絵本がある。その中に、次のような印象深い詩がある。

いのちが一番大切だと／思っていたころ／生きるのが／苦しかった
いのちより／大切なものが／あると知った日／生きてるのが／嬉しかった⁽³⁶⁾

これは、中学校体操部の指導中に頸椎を損傷する事故により、二四歳で手足の自由を突然失った元体育教師の言葉である。彼はイエス・キリストの死を通して愛によって新しく生かされた人である。実存の深くかかったこの詩において、星野は「いのちより大切なもの」が「ある」と意思表示した。一方、この詩をめぐる散文において、星野は反語的

にこう問いもする。「いのちがいちばん大切だとしたら、健康で長く生きることだけが価値ある人生なのだとしたら、生きるのは、あまりにも悲しくて苦しい連続ではないでしょうか」⁽³⁷⁾。

星野は、いのちが一番大切なものだとは思わなくなった人である。併せて、健康で長く生きること最高の価値を認めない人もなった。そして、彼は、いのちに最大の価値を置く生は苦であり、いのち以上に大切なものを知る生は喜びとなる、ということ唱歌う詩人となったのである。なぜか。それは信仰の秘儀に関わる。

この「いのちよりも大切なもの」に関わることとして、星野は同じ本の中で一つの決定的な例話を記している。

津波が迫る中、水門を閉めるために津波のほうに向かって走っていった人、人の波に逆らうようにして、

「津波がくるぞ」と知らせて回っていた人、その人たちは皆、自分のいのちよりも大切なものに向かって

いった人ではないかと思えます。⁽³⁸⁾

星野が言及した「その人たち」の中には、その行為の結果「自分のいのち」を失った人たちがいたことであろう。しかし、それと引き換えに生かされたものがあつた。それこそは、自分以外の誰かの生命、他者の生命ではなかつただろうか。星野が語る「いのちより大切なもの」とは「自分のいのちより大切なもの」のことであつて、他者の生命はそこに含まれていない。

ここで改めて問おう。生命より大切なものはあるか。この間に対する応答は、誰の生命を指すかによつて逆のものとなる。その生命を自己の生命とするか、それとも自己以外の生命もそこに含めるのか。それよつて、キリスト者の答えは逆になるのである。問題の核心は「生命の所有者」である。ここで、冒頭に掲げた命題を取り挙げてみよう。

命題 1

キリスト者には、自己の生命より大切にしよう期待されるものがある。それは愛する他者の生命である。愛は生命を生かそうとする。最も大きな愛は、他者の生命を生かすために自己の生命をさえ捨てる。この愛は、生命の根源である神によって、生命であるイエス・キリストの死を通して示された。

キリスト者には「生命より大切なものがある」と、ただ断言することについて、われわれは慎重でなければならぬ。そう断言することになれば、その断言は律法のように自らに降りかかり、「生命より大切なもの」のために生命を捨てることができずにいる自他を裁くこととなってしまうであろう。「生命より大切なものはあるか」と問われて、われわれはやつとこう言うことができるのみである。すなわち、「キリスト者には、自己の生命より大切にしよう期待されるものがある」と。誰からの期待であろうか。「神」と「イエス・キリスト」からである。ここで鍵となるのは、旧約聖書に記された「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ記一九・一八）という言葉と、新約聖書に記された「隣人を自分のように愛しなさい」（マルコ福音書一二・三一、およびその平行箇所）というイエス・キリストの言葉である。

この命題に適用できる生命とは「自己の生命」のみである。すなわち、「自己の生命より大切にしよう期待されるものがある」ということではない。愛によって立つ時、その他の生命をここに適用することは許されない。ここでの生命に自己以外の生命を含める場合には、即命題 2 へと進まなければならない。

では、自己の生命より大切なものは何か。実は、それもまた生命であるとわれわれは答えることとしよう。ただし、その生命は自己以外の生命、すなわち他者の生命、しかも愛する他者の生命である。さらにその生命は、自他の

生命を含めた全ての生命を生かそうとする生命に結びつく。この生命はあらゆる生命を生かそうとする愛の一つである。この愛は、生命の根源である神を指す。神は愛（アガペー〈agape〉）なのである（ヨハネの手紙Ⅰ四・八、一六）。新約聖書には、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ福音書一五・一三）というイエス・キリストの言葉が残されている。ここでは友のため、すなわち自己以外の愛する者のために自己の命（プシケー〈psyche〉）を捨てることは許されているばかりか、「これ以上に大きな愛はない」とまで言い切られている。生命を死に至らしめることが許されるのは、ただこの場合のみである。しかも、そこでは「友のために自分の命を捨てる」行為は最大の愛とされた。人は他者の生命を生かすためという条件の下では、自己の生命を犠牲にすることが許されるのである。実際、世にはそのように生き、死んだ人々がいた⁽³⁹⁾。そのような人々は、自己の生命より大切なもののために、自己の生命をささげたのである。

生命を生かそうとする思いと行為の核心にあるのは愛である。その愛は自己の生命を第一とする利己的自己愛ではなく、他者の生命を生かすため自己の生命を犠牲にするほどに他者を愛する愛、すなわち利他的他者愛である。ここに究極の愛、最も大きな愛が示される。イエス・キリストはその愛を最大の愛と見なした。そして、自らもその愛による死を遂げたのであった。十字架刑をもつて殺されたイエスの死は、伝統的なキリスト教理解においては贖罪の死を遂げたことと受け止められてきた。その死において、神の愛が具現された教会によって信じられてきたのである。その愛こそは、自己に死んで他者の生命を生かそうとする愛であった。

愛は生かす。利己的自己愛は殺し、利他的他者愛は生かすのである。利己的自己愛は自己のために他者を犠牲にし、死へと至らせもする。その結果、自らも死に至らしめることとなる。他方、利他的他者愛は自己に死んで他者を生かそうする。その結果、自らも新しく生きることとなる。聖書は、神がイエス・キリストを通してこの愛を示されたことを証言する。すなわち、イエスの死は他者の生命のための死であり、その死は自己に死んで他者を生かそう

とする愛によるのであつた。

信仰による目は、愛と生命(いのち)がイエスにおいて一つとなつたことを見る。その愛において生命(いのち)が死に触れ、生命と死が一つになつたことを見る。それは、生ける神と死せるイエスとの間で起こつた、いわば「最高の逆説的同一性」⁽⁴⁰⁾(ユンゲル)あるいは西田幾多郎の言葉を借りれば「絶対矛盾の自己同一」である。既述のように、聖書によれば、神は愛であつて、イエス・キリストは自らを生命(いのち)(ゾーエー〈ζωή〉)と同定した(ヨハネ福音書一四・六)。神の愛は、このイエスの死において究極的に現わされたのであつた。神は世を愛し、世を救うために、子なるイエス・キリストを世に与えられた(ヨハネ福音書三・一六)。世に現れたイエスは世を殺すためではなく、これを生かすために生きた。彼は虐げられている人を憐み、空腹の人にパンを与え、病の人を癒し、苦しみ悩む人を慰め、悲しんでうずくまっている人を励まし起こした。また、罪人というレッテルを貼られて世から差別されている人や社会の片隅へと追いやられている人に赦しを告げて解放し、希望を与え、抑圧された名も無き民衆と共に生きた。⁽⁴¹⁾ 彼がそのように生き、世に仕えたのは愛からであつた。誤解からだつたとはいへ、彼は民衆から喜ばれた。それにもかかわらず、あるいはまたそうであるがゆえに、彼をねたみ(マルコ福音書一五・一〇、その他平行箇所)憎む人々があらわれて、ついに彼はおぞましき十字架刑に処されることになつた。その時、彼は自己の生命(いのち)を惜しんでこれを生かそうとせず、却つて自己のからだと生命(いのち)とをユダヤ人エリートたちとローマ帝国当局と民衆とに委ねた。その結果、彼は十字架につけられて殺され、死んだのである。しかし、彼は自分を十字架につけて殺そうとする者たちを呪わなかつた。むしろ十字架の上で神に彼らの赦しを願つてこう祈つた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ福音書二三・三四)。十字架につけられ、死が近づく中で現されたキリストの愛は、自らを殺そうとする者たちを赦し、かえつて彼らを生かそうとする愛だつた。

キリスト者は十字架上で現されたイエスのこの愛と死において神の愛を見る。それは赦しの愛であり、赦しをもつて

自らを殺す者の生命をさえ生かさうとする愛である。また、キリスト者はイエスを十字架につけて殺した者たちの中に自らの姿を見る。そして、イエスによる赦しの対象の中に自らも含まれていることを見る。だから、イエスがこの愛を自己の死をもって「私のために」果たしてくれたと信じる者にとって、自己の生命はキリストの生命がかかったものとして、すなわちキリストの死がかかったものとして、何にも優つて大切なものである。しかし、そのキリストの死をもって生かされたことを感謝するキリスト者の心には、必ずやイエス・キリストのあの言葉が力強く響くことになる。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい」(マルコ福音書八・三四、その他平行箇所)。キリストの死は「私のため」だけではなく、「私以外の他者のため」でもあつた。だから、イエス・キリストによつて生かされたことを感謝して、彼に従つて生きることを願う人においては、時に自己の生命を他者のために犠牲にするほどに他者の生命を大切にすることも起こり得るし、実際にそれは起こつてきたのである。他者の生命のために自己の生命を捨てる人は、愛からそうするのである。

以上より、われわれは命題1についてこう述べよう。生命の根源である神によつて生命が与えられ、イエス・キリストの死をもって「私の生命」が生かされたことを信じ感謝するキリスト者にとつて、自己の生命より大切にしよう期待されるものがある。それは愛する他者の生命である。愛は生命を生かさうとする。この愛が生かさうとする生命こそは、「生命より大切なもの」である。この愛は自らを生命と同等されたイエスの死において究極的に表された。愛と生命は神にあつて一つである。神は愛であり、生命の根源であり、イエス・キリストにおいて生命だからである。

命題2

キリスト者には、生命より大切なものはない。生命の根源である神は、生命の神であつて、生命だからである。愛は生命を生かさうとする。最も大きな愛は、他者の生命を生かすために自己の生命をさえ捨てる。この愛は、愛である

神によって、生命であるイエス・キリストの死を通して示された。

命題1において「生命より大切にしよう期待されるものがある」と言い表されたときの生命は、自己の生命に限定されたものであつて、それ以外の生命についてこれを適用することは許されないものであつた。その生命に他者の生命を含めるとき、人は「生命より大切なものはない」と述べるのが許されるのみである。なぜなら、そう述べてこそ、それは愛の言葉となるからである。神であれ愛であれ信仰であれ他の何であれ、他者の生命より大切なものを認め、その大切なもののために他者の生命を犠牲にすることを認めるところに真の愛はない。このことは、生命の根源あるいは源泉は神であり（詩編三六・一〇）、その神が生命の神である（詩編一八・四七、四二・三、八四・三）という信仰に基づく。聖書の信仰に立つキリスト者にとつては、神が生命の根源であり、イエス・キリストが生命であるが故に、生命より大切なものはないのである。生命はあらゆる生命の根源である神と結びつく。

ここで改めて、新約聖書に記録されているイエス・キリストの驚くべき自己認識に目を向けてみよう。ヨハネ福音書によれば、イエスは「私は道であり、真理であり、生命である」（ヨハネ福音書一四・六、傍点筆者）と語つたとされている。少なくともヨハネ共同体はそう信じた。神は生命の根源であり、生命の神であるという旧約聖書の信仰から見るならば、このイエスの言葉はほとんど自己の神宣言にも等しい。ところが、自らを生命と同定したイエスが十字架につけられて処刑され、死んだのである。イエスが死んだということは生命が死んだということではないか。イエスの死において生命の神が死に触れ、死と一つとなつたのである。この死は、自らを殺そうとする者の赦しを神に対して願う愛に支えられたものである点で、自己の死をもつてなお自己を殺そうとする者の生命を生かそうとした死であつた。イエスのこの死は赦しをもつて他者を生かそうとする死だったのである。実際、イエスの死に表された赦しの愛によつて、これまで多くの人々が生かされてきた。「私は……生命である」と記されたイエスの言葉を信じる限り、イエスの

死は、死の死である以前に生命の死として、生命が他者のために自己の生命を捨てたことと受け止められるものとなる。死によつて表されたこの赦しの愛は、自らを生かそうとして他者を殺すことをせず、逆に他者の生命を生かそうとして自らに死ぬ愛であつた。すなわち、自己の生命を捨てる愛だつた。生命の神がイエスを通してこの愛を示された。キリスト者は、この愛によつてすべての生命は与えられ、また生かされていることを信じるのである。

すべてこの世の生命は愛なる神によつて与えられたものである。この信仰に立つ時、「生命の所有者」の問題は主題の核心に触れるものとなる。果たして、人は自己自身の生命も含めて生命を所有することが許されるであろうか。キリスト者は、自己の生命も他の全ての生命も神からの賜物であると信じるが故に、その本来の所有者は神であることを信じる。神の所有を人間が自由勝手にすることは許されない。それはまさに生命の尊厳を犯すことである。ましてや、生命を自由勝手に死へと引き渡すことは許されない。唯一それが許されるのは、他者の生命を生かすために自己の生命を捨てる時、しかも愛に基づいてそうする時のみである。⁽⁴²⁾

以上より、われわれは命題2について、命題1を踏まえてこう述べよう。生命の根源である神によつて生命が与えられ、イエス・キリストの死をもつて「私の生命」が生かされたことを信じ感謝するキリスト者にとつて、生命より大切なものはない。生命の神は、自らを生命と同一した子を通して、愛する他者のためにその生命を捨てたのである。あらゆる生命は神からの賜物であつて、この神に由来する。愛は生命を生かそうとする。この愛と生命は神にあつて一つである。神は愛であり、生命の根源であり、イエス・キリストにおいて生命だからである。

V. おわりに——「生命の尊嚴の確立」のために

われわれは「生命いのちより大切なものはあるか」という問いを立て、キリスト教信仰の立場からこの問いに取り組んできた。その答えは、生命いのちの設定の仕方によって「ある」とも「ない」ともなった。より正確には、生命いのちを「自己の生命いのち」に限定した場合には、生命いのちより大切にするよう期待されるものが「ある」となり（命題1）、「自己の生命いのち」という限定をとった場合には「ない」となった（命題2）のである。これら二つの答は相反するもののようでありながら、両者共に「生命いのちの根源は神であり、神は愛である」という信仰のもとに導かれたものである点で、根拠を同じくするものであった。こうして、命題1と2は同じ信仰的根拠によって両立するものであって、両者は相互補完的な関係にある。すなわち、命題1は命題2を前提として成立し、命題2は命題1へと導かれるという関係にある。結局のところ、神は生命いのちの根源として生命いのちの生命いのちであるという信仰によって立つキリスト者には、生命いのちより大切なものは「ない」のである。他者のために自己を犠牲にするところに愛があり、愛する他者を生かすために自己の生命いのちを犠牲にすることが最も大きな愛とされるのも、生命いのちより大切なものは「ない」からに他ならない。自己の生命いのちを犠牲にし、死をもつて私を生かしてくれた人がいるなら、その人は私にとって最大の友である。その人は私を愛してくれたのである。

聖書において証言される生命いのちの根源としての神と、神の子イエス・キリストの死によって自己の生命いのちが新しく生かされて今あることを信じ、それゆえにイエスに従って生きたいと願うキリスト者は、生命いのちを生かすための努力をする。その努力は必ずや「生命いのちの尊嚴の確立」のための努力に結びつくであろう。なぜなら、「生命いのちの尊嚴の確立」は、生命いのちを軽んじたり、これを死に追いやるためのものではなく、逆に生命いのちを何よりも大切なものとして生かすためにこそ望まれ

るものだからである。

「生命の尊嚴の確立」に必要なものは愛である。愛ある所では、他者の生命は時に自己の生命に優つて大切なものとされる。この愛は利己的自己愛ではない。利己的自己愛は自己を生かさうとして他者を犠牲にし、時には他者を死に至らしめもする。それはまた自己の生命を死に至らしめることにもなる。利己的自己愛の周囲には死の香りが漂う。利己的自己愛は、神の子を殺してしまうほどに傲慢で恐ろしい愛である。しかも、この愛は死のように強力で、この愛からの解放は自らの努力では不可能なほどに困難である。「生命の尊嚴の確立」に求められる愛はこの愛の反対、利他的他者愛である。神がイエス・キリストを通してこの愛を示されたのであつた。この愛を目指すことなくしては、根本的には「生命の尊嚴の確立」は不可能であるし、それを確立する意味もなくなるであらう。たとえ「生命の尊嚴の確立」のための法や制度がよく整備されたとしても、そしてその整備は現実的に喫緊の課題なのであるが、その執行に愛が伴わなければ、生命あるものの心身を真に生かすことにはならない。

ここに至つて一言及しておきたい問題がある。それは、われわれが生命について考えるとき、ユンゲルが死について主張したように、これを「人間のこと」に限定しているだけでよいかという問題である。生態系や自然環境の破壊が地球規模で深刻な問題となりつつある昨今、われわれは生命の事柄を「人間のこと」に限定せず、生命ある動植物などの生物が生きる全被造世界にまで拡大して捉えることが求められている。人間の生命と他の被造物に宿る生命は、相互依存的関係にある。生命の問題は、今や人間の生命と共に、動植物などの生態系ならびに自然環境を含む全被造世界に宿る生命の問題として具体的に立ち現れているのである。われわれは、生命を与えられた存在として、こうした状況をただ座視しているわけにはいかない。

聖書によれば、人間の生命は神に由来する（創世記二・七）。しかし、動植物を含む自然界や全宇宙に満ち満ちている生命、それらもまた神に由来する（特に創世記一章）。万有の創造者は生命の神である。そうであれば、「生命の尊嚴

の確立」のためにその対象とされるべき生命の第一は「人間の生命」であるとはいえ、今やその対象を人間の生命に限定することで満足してはならないであろう。むしろ、生命の問題は人間のみならず他の動植物をも含む生態系や自然環境に関わる問題として、全被造世界がその対象とされることが重要である。神の救いの対象は人間に限られていないのである（詩編三六・七）。

最後に、もう一度「いのちの尊厳の確立」の重要性を心に留めつつ、「私は道であり、真理であり、命である」といわれたイエス・キリストの言葉に立ち戻って、生命を問うてみたい。果たして、生命とは何なのか。この問いは、キリスト者にとつて「イエス・キリストが生命である」という信仰告白を他にして扱うことはできない。この信仰告白は、神の子イエス・キリストを子なる神として受け入れるキリスト者にとつて「神は生命である」と告白することとなる。こうして、キリスト者にとつて生命の尊厳を確立することは、神の尊厳を確立することに等しいこととなる。生命は、死と同様、神秘の次元に関わる。したがって、「生命の尊厳の確立」という課題は、キリスト者にとつて生命の根源としての神への信仰を抜きに取り組むことを困難にする。「生命の尊厳の確立」への取り組みは、極めて信仰的な事柄として、結局は「神の尊厳の確立」にまで踏み込むことにならざるを得なくなる。キリスト者にとつて、「生命の尊厳の確立」に努めることは、実に「神の尊厳の確立」に努めることに等しいのである。

この小さな論考が「それは人それぞれ」という世の常套句によつて解消されてしまわないために必要なことも「神の尊厳の確立」であり、そのための「信仰の確立」なのである。

注

* 本論文は、金明容教授（韓国・長老会神学大学校第二十代総長）引退記念論集『*하나님의 은혜*』, *세움연구소*, 2017) 中, 金明容 (Souil: 김명용, 2017) 著「オン神学の地平」責任編集・尹哲昊、朴成奎、白忠鉉（ソウル・長老会神学大学校出版部、二〇一七年）に掲載された韓国語論文に一部手を加えた日本語版である。本紀要への掲載は金明容教授から許可を得てするものである。

(1) サタンの言葉。神が「無垢な正しい人」とする人ヨブをめぐって、サタンは、ヨブでも命がかかれば神を呪うにちがいないと主張した。それに対する神の言葉も命をめぐるものであった。「それでは、彼「ヨブ」をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな」（ヨブ記二・六）。神とサタンという対極的なものが、双方共にここで最後究極的なものと位置づけているのも「命」であることが見て取れる。ただし、その背後には「罪」の問題が横たわっていることが忘れられてはならない。

(2) 「いのち」の意味は、その定義の仕方によって様々である。例えば、時間設計の観点から永遠性と結びつけて「いのち」を定義する科学者がいる。安藤四一によれば、いのちには犬や猫でも持つものとして第1の「肉体のいのち」と第2の「精神（心）のいのち」があるが、その外に「第3のいのち (3rd stage of life)」がある。これを安藤は「個性から生まれる創造」と定義した。安藤四一『コンサートホールの音響と音楽表現』（アルテスパブリッシング、二〇〇九年）、一四五―一四六頁。他に Yoichi Ando, *Brain-Grounded Theory of Temporal and Spatial Design. In Architecture and the Environment* (Tokyo: Springer Japan, 2016), preface を参照。また、科学者の立場から生命の問題に対して総合的なアプローチするものとしては、古典的なものながら、E・シュレーディンガーの勇氣ある著書 Erwin Schrödinger, *What is Life?: The Physical Aspect of the Living Cell* (Cambridge: University Press, 1944), (邦訳『生命とは何か』岡小天・鎮目恭夫訳、岩波書店、一九五一年、岩波

新書72)を挙げておこう。

- (3) 阿久戸光晴「人間の『いのちの尊厳』理念の確立を目指す」『専制と偏狭を永遠に除去するために』(聖学院大学出版会、二〇一五年)、一四九頁。

- (4) 阿久戸、同上書、一四九—一五〇頁。日本の自殺者総数は、一九九八年に初めて三万人を超えて以来、二〇一一年まで連続して三万人を超えていた。しかし、二〇一二年以降は毎年減少傾向にあり、直近の二〇一六年は二万一七六六人(二二月末速報値)と二年ぶりに二万二〇〇〇人を下回った。とはいっても、日本では依然おびただしい数の人々が自死という形を選び取っている現実があることには変わりない。自殺者数の統計については、厚生労働省の「人口動態(確定数)」を参照のこと。また、二〇一六年の統計については、警察庁発表の「平成二八年の月別自殺者数について(二二月末の速報値)」を参照のこと。

- (5) 阿久戸光晴、同上書、一四九頁。

- (6) 阿久戸光晴「生きる厳しさを伝えて」、同上書、九八頁。ここでは、カール・バルト(Karl Barth)の『教会教義学』第三卷(創造論 第四分冊)に展開された死刑廃止論が簡潔に紹介されている。バルトに限らず、キリスト教信仰に基づいて死刑制度とその執行に反対するキリスト者が多い中、「十字架につけられた神に対する尊厳」との関連で死刑に反対するユンゲルの主張は刮目に値する。その要点は、「死を自由にする」と「人間存在のどのような領域においても不法」であること、そして「すべて『死刑』は、十字架につけられた神に対する尊厳を傷つける反逆罪」であるという考えによっている。E・ユンゲル『死』(新教出版社、一九七三年)、二二五頁。同様の信仰的線上に立ちつつ、最近は生命神学の観点から死刑廃止を主張する神学者たちも現れてきた。中でも韓国でオン神学(Ohn Theology)運動を出帆させ、現在これを推進しつつある神学者金明容(キム・ミョンヨン)の死刑廃止論は、生命神学的観点からのものとして注目される。以下を参照のこと。김명용 『죽어가는 세계』(Seoul: 장로교회신학연구소, 2016)〈金明容『オン神学の世界』(ソウル・長老会神学大学校出版部、二〇一六年)〉, 184-186頁。本著の英訳は Myung Yong Kim, Tr. by Junghyung Kim, *The World of Ohn Theology* (Seoul: Presbyterian University and Theological Seminary Press, 2016) として出版された。

- (7) 阿久戸『専制と偏狭を永遠に除去するために』, 九八—九九頁。

- (8) 以上、同上書、一五〇頁。

- (9) 박근영 『바른생명의 지혜』 209. 韓国の長老会神学大学校前総長の金明容は、韓国のオン神学会会長ならびに生命神学研究
所所長として生命神学をリードしている。
- (10) 同上書、210. 卒。
- (11) 同上書、210. 卒。
- (12) 桑田秀延 『基督教神学概論』 『桑田秀延全集1』 (キリスト新聞社、一九七六年)、四四七頁。
- (13) E・ユンゲル 『死』 蓮見和男訳 (新教出版社、一九七三年)、一六一頁、また一〇六頁を参照。
- (14) V・ジャンケレヴィッチ 『死』 仲沢紀雄訳 (みすず書房、一九七八年)、四三頁。
- (15) ユンゲル 『死』、二二六頁。
- (16) 同上書、三一頁。
- (17) 同上書、五九頁。
- (18) 同上書、二〇頁。
- (19) 同上書、二九頁。
- (20) 関根清三、竹内裕 「旧約聖書『生かされてある』生」、関根清三編 『死生観と生命倫理』 (東京大学出版会、一九九九年)
三頁。本論文は、旧約聖書に基づいて、生命の受動的側面に注目し、特に「場」の問題と関連づけて生命の問題を掘り下
げた研究として重要である。
- (21) 死 (thantos) の学 (logos) としてのサナトロジーについては、立場によつて充てられる訳語も様々である。精神医学者
の平山正実によれば、それは日本では死学、死相学、死亡学、死生学、生死学などと訳されてきた。キリスト教信仰の立
場から考察されたサナトロジーに関する著作としては平山正実の『死生学とは何か』(日本評論社、一九九一年)と『死と
向き合つて生きる』(教文館、二〇一四年)ならびに神学者の熊澤義宣『キリスト教死生学論集』(教文館、二〇〇五年)
が参考になる。なお、サナトロジーの訳語として、熊澤は「死生学」を採用するが、平山は「生死学」がふさわしいとし
(上掲『死と向き合つて生きる』、一八五頁)、「死生学」と訳すことを自然としていたそれまでの自分の考え(上掲『死生
学とは何か』、一六頁)を後に修正している。
- (22) ジャンケレヴィッチ 『死』、六頁。

- (23) ユンゲル『死』、一六頁。
- (24) M・アンリ『キリストの言葉——いのちの現象学』武藤剛史訳（白水社、二〇一二年）、一〇五頁。
- (25) ユンゲル『死』、二五—二六頁。
- (26) ジャンケレヴィッチ『死』、六頁。
- (27) ユンゲル『死』、二九頁。
- (28) 平山正実『死生学とは何か』（日本評論社、一九九二）、一六頁。
- (29) 医療技術の発達した今日、生と死の境界の問題については、いわゆる遷延性意識障害に陥った人の状況などがまず考えられるべきであろう。しかし、ここではより根本的な仕方人間をそもそも「ほとんど死んでいる」者と捉える人間理解が古来あつたことを念頭に置いている。その伝統においては「汝自身を知れ」（γνώθι σεαυτόν, nosce te ipsum）は「死を忘れるな——メモメント・モリ（memento mori）に結びつくのである。
- (30) ユンゲル『死』、四八頁。
- (31) 同上書、八三—一〇五頁を参照のこと。
- (32) 同上書、一三三頁。
- (33) 同上書、一三五頁。
- (34) 以上、同上書、一三三頁、一九四頁、二二八頁、一五〇頁。罪を関係喪失へ追いやるものとして捉え、死をその総計と見なすユンゲルの視点は、死を単なる生の終りの出来事とは考えない。むしろ死は、「関係喪失へと追いやる現実の可能性として、いつでもある」ものとして理解されている。同上書、一三三頁。
- (35) J・モルトマン「個人の希望——輪廻か、永遠の生命への復活か」、E・モルトマン・ヴェンデル/J・モルトマン『現代の終末論とフェミニズム』日本講演集1996、モルトマン夫妻招聘委員会編〈新教コイノーニア16〉（新教出版社、一九九七年）、九頁。
- (36) 星野富弘『いのちより大切なもの』（いのちのことは社フォレストボックス、二〇一二年）二四、五〇頁。
- (37) 同上書、二五頁。
- (38) 同上。傍点は筆者による。

(39) 星野富弘の言及にあった「津波が迫る中、水門を閉めるために津波のほうに向かって走っていった人、人の波に逆らうようにして、『津波がくるぞ』と知らせて回っていた人」たちは、そのような人々であったことであろう。しかし、われわれはここで日本と関係のある神父マキシミアノ・マリア・コルベ (Maksymilian Maria Kolbe) の名前を特別に記憶しておきたい。ポーランド出身のコルベ神父はアウシュヴィッツ強制収容所で餓死刑に選定されてしまった一人の人の身代わりを申し出て、一九四一年八月一日日に注射を打たれて死んだ。伝承によれば、餓死監房で二週間経って生き残っていた彼は死を早める「注射のとき、自ら腕を差し出した」という（この伝承は聖コルベ館—St. Korbe Museum サイト <http://kolbenmuseum.com/?mode=f2> で確認できる）。この行為は、単なる安楽死あるいは尊厳死を選び取る以上の行為である。他者の死の身代わりとなった者として、その身代わりとしての死を確実にする行為だからである。いずれにせよ、彼の犠牲的死によって一人の人の生命が生かされ、また多くの人々が神に対して新しく生きることになったのである。彼は一九三〇年に日本の長崎に上陸し、聖母の騎士修道院を設立して一九三六年まで日本で宣教と神学校での教育に従事した。

(40) ユンゲル『死』、一八三—一八五頁。

(41) 詩編一四六・六b—九が想い起こされる。

(42) 「唯一生命を死へと引き渡すことが許される場合」について言及したとはいえ、この問題には、いわゆる尊厳死あるいは安楽死の問題が関わってくることを見過ごしにすることはできない。いわゆる「回復の見込みのない病態」に至った末期の患者、あるいは死を目前にしてなお肉体的に非常なる苦しみの中に置かれている人々について、それは「唯一生命を死へと引き渡すことが許される場合」に当てはまらないということを理由にして、尊厳死あるいは安楽死（あるいは自死まで含めて）、これらの死を十把一絡げに「否」と退け、裁きの対象とすることに愛があるかどうか省みる必要がある。ここではただ生命を「自由勝手に死へと渡すこと」とならない限りにおいて、しかもその行為に「その人」を愛する愛が認められる限りにおいて、慎重の上にも慎重を期した上で、尊厳死あるいは安楽死についてのドアを開けておく可能性を認めておくこととしたい。

(43) ユンゲル『死』、一六頁。

参考文献

- 阿久戸光晴『専制と偏狭を永遠に除去するために』(埼玉・聖学院大学出版会、二〇一五年)
- 安藤四一『コンサートホールの音響と音楽表現』(東京・株式会社アルテスパブリッシング、二〇〇九年)
- Yoichi Ando, *Brain-Grounded Theory of Temporal and Spatial Design: In Architecture and the Environment* (Tokyo: Springer Japan, 2016)
- M・アンリ『キリストの言葉——いのちの現象学』武藤剛史訳(東京・白水社、二〇一二年)。Michel Henry, *Paroles du Christ* (Paris: Éditions du Seuil, 2002)
- 熊澤義宣『キリスト教死生学論集』(東京・教文館、二〇〇五年)
- 桑田秀延『桑田秀延全集1』(東京・新教出版社、一九七六年)
- E・シュレーディングァー『生命とは何か』岡小天、鎮目恭夫訳(東京・岩波書店、一九五一年)。E. Schrödinger, *What is life?: the physical aspect of the living cell* (Cambridge: Cambridge University Press, 1944)
- V・ジャンケレヴィッチ『死』仲沢紀雄訳(東京・みすず書房、一九七八年)。Vladimir Jankelevitch, *La Mort* (Paris: Flammarion, 1966)
- 関根清三(編)『死生観と生命倫理』(東京・東京大学出版会、一九九九年)
- 平山正実『死と向き合って生きる』(東京・教文館、二〇一四年)
- 平山正実『死生学とは何か』(東京・日本評論社、一九九一年)
- 星野富弘『いのちより大切なもの』(東京・いのちのことば社フォレストブックス、二〇一二年)
- E・モルトマン『ヴェンデル/J・モルトマン』現代の終末論とフェミニズム』日本講演集1996、モルトマン夫妻招聘委員会編〈新教コイノーニア16〉(東京・新教出版社、一九九七年)

- E・ユンゲル『死』蓮見和男訳（東京：新教出版社、一九七三年）。Eberhard Jüngel, *Tod* (Themen der Theologie 8), (Stuttgart: Kreuz-Verlag, 1971)
- 김명용『오신학의 세계』(Seoul: 장로회신학대학교출판부, 2016)〈金明容『오신학の世界』(ソウル：長老会神学大学校出版部、二〇一六年)〉英訳 Myung Yong Kim, *The World of Ohn Theology*, Tr. by Junglyung Kim (Seoul: Presbyterian University and Theological Seminary Press, 2016)